WPI Journal, Spring 1990

The Trailblazer and the Goat Keeper

開拓者と「山羊の守り神」

日本に帰り、工業界で極めて際立った業績を残した WPI 最初の 2 人の日本人卒業生の物語
註：WPI は Worcester Polytechnic Institute でその前身は Worcester Technical College

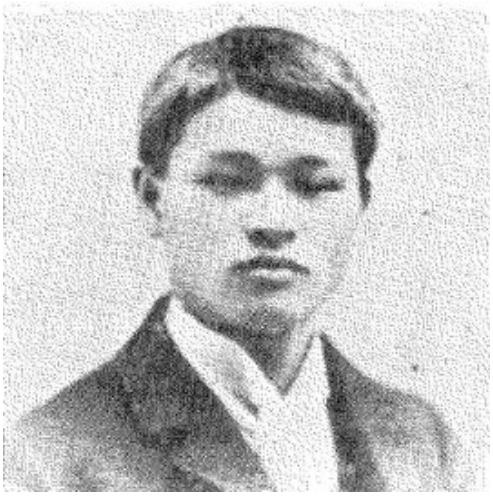
WPI 同窓会は WPI の卒業生の顕著な業績を立てた初期の卒業年度の卒業生の年代記を、取りまとめている。発明者、設計者、生産のエクスパート、企業家、規模の大小にかかわらず企業の経営者あるいは社長等、WPI の卒業生はアメリカの生活環境を変える「工業革命」の担い手として貢献してきた。

初期には、地球の裏側からやってきて言葉や文化の壁を乗り越えながら WPI の学位を取得した少数の学生がいる。彼らがヨーロッパ、アジア、さらには南米に帰国した後ここで受けた教育成果を基に、それぞれの国の伝統に計り知れない変化をもたらした。

1888 年卒業生の中でその当時の 4 人の留学生の中の一人であり、上位 10%の中にいた下村幸太郎氏はその一人である。下村が化学の学位を取った年の翌年、同郷の桑田權平が 1893 年卒のクラスの機械工学科に入学した。両名は WPI の最初の留学生であるが、様々な点でその後に続いた留学生の模範となった。

NEW EVIDENCE OF EVOLUTION FROM VEGETABLE TO ANIMAL.

以下下村氏の紹介がありますが、ここでは省略して、桑田權平の分のみを紹介します。



下村が WPI の学位を取るために勉強している時に、桑田權平はマサチュウセッツ州のノーザンプトン高校で、WPI に入る準備をしていた。二人は構内で出会うことはなかったが、この時代に知り合いになった。その後、両者は親友となり、ビジネスパートナーとなった。

1893 年のイヤーブック（卒業写真集）には、權平が卒業までに、全ての繊細な「ヤンキー冗句」を完全にマスターしていたと記されている。彼は低学年時に大学の最も選ばれたクラブの「通常会員」になっていた。シグマ・アルファ・イプシロンという秘密結社（というか会員限定組織の学生会）を PWI で作成するための創設委員にもなっている。またクラスの正式な「マスコットの旗手」に選ばれていた。すな

わち、クラスや学校行事の全てにおいて、マスコットの「山羊」を連れてパレードする責任を負わされたのである。

One of many scenes of natural beauty drawn by Kuwada for his yearbook (top). Kuwada in later life (below).

彼のイニシャル：G. K が「Goat Keeper：山羊の守り神」のそれと一致することから、桑田に因んで山羊の名前が付けられたという伝説が生じた。

1983 年のイヤーブックに、当時の流行歌のパロディーとして次のような詩が載っている。

頭のてっぺんから足の先までかっこいい東京から来たダンディ

ふざけた質問で教師を困らせそれを聞いた多くの人は苦笑せずにはいられなかった

93 セント（1893 のもじり）でマスコットの「山羊」を買ってきて無償でそれを飼っていた。でも彼は「もう少し安く買えたのにな。」と言っていた。

桑田はフリーハンドの絵画の名手で、イヤーブックのために多くの作品を載せている。

1941 年初め、桑田は卒業 50 年の再会を期待し学生時代を懐かしみながら、ハーバート・テイラーに手紙を書いた。「級友が「老人になった山羊の守り神」がどんな状況か知りたいと思っていると君が思ったなら、君の投稿欄の隅に書きこんでおいて欲しい。自分のことが文章などに書かれているのを見ると、かなり歪曲にまたはオーバーに書かれている節がある、読んでも自分とは思えないことが多くある。そこでここでは正直に書くことにしよう。」

桑田は彼の人生と職歴について長い手紙を書いてくれた。卒業後、彼は帰国して大阪で陸軍の工兵廠の機械技師となった。そこで 9 年間働いた後、川崎造船所の造船技師となり神戸で働いた。8 年後引退し、海辺の別荘に引退したが、PWI の卒業生の一人：下村幸太郎氏に呼び戻されて工学の分野に戻った。

下村は桑田に大阪ガスの機械部門の主任になるように要請した。そこに在職中、傍系の染料会社の設立に関与した。他の人との共同作業に疲れたこともあり、最終的に紡績工場の「スピンドル（紡錘機）」を作る小さな会社を設立した。その当時彼の書いたものによると「この機械部品はすべて輸入されていたが、欧州戦争により外国製の供給が途絶え 1 つも輸入されていなかった」

企業を経営するということはそれまで以上に「他の人のために働く」ことを意味するが、彼はそこで 22 年間働き、彼の紡錘機は日本の紡績工場の 60%を占有するにいたった。月間数百台の生産量は二十万台となり、生産ラインの増設を図った。それでも、新製品への需要は生産能力を上回るほどであった。

彼は友人に彼自身についてこう語っていた。「事業の最盛期のうちに会社の社長のイスを退いた。会社は最終的に大企業になった。自分の戦いは終わった。」そして、彼は付け加えた「ハンプティ・ダンプティのようにもう元に戻ることはない。」

引退後京都の植物園で草類の研究をした。彼の家庭でのしつけに因んだ関心のある分野として数世代の教授陣とともに大阪大学の医学研究の援助をした。

最後に彼は 47 年間の仕事は「とても面白かった。この時代は機械工学と産業の発展期であった。それと同時に戦争の影響の最も強かった時代だった。」と結論付けていた。

桑田が書き漏らしたことは、1928 年に WPI が彼に名誉工学博士号を授与したことです。この年、彼の卒業 35 周年に当り、「老山羊の守り神」は彼の卒業時を思い起こさせる「伝統」を見ることができたのです。級友たちがブロンズの頭のレプリカを発注しそれをとても小さな体型の山羊に載せました。このブロンズの頭はその後、1 年生と 2 年生の伝統的な競争の勝者へのトロフィーとして大学に寄付されました。

桑田のたった一人の子供：桑田季徳は 1930 年に WPI に入ったが、在学中に病気になり亡くなりました。彼からハーバー・テイラーへの手紙で「死んだ子の年を数えるのは何の意味はないが、WPI の機関誌で沢山の若い学生たちを見ると、成長した子供のことを思い起こさせ、彼が WPI で勉学中や病気の際に彼に示してくれたアメリカ人の友人の親切を感謝の念をもって思い起こさせてくれる。このような思いやりの気持ちがあれば、相互の理解が進み国々を戦争に巻き込むことがなくなると考えている。」

しかし、そのような日本とアメリカとの間の相互理解は形成されなかった。桑田は 1943 年の WPI の 50 年祭への出席を期待していたが、第二次世界大戦が、彼が愛した両国を最大の敵国同士にしてしまった。桑田と WPI 関係者との最後の接触は 1947 年に行われた。フランクハーディングは、亡くなった祖父ジョン・コーリンから日本人学友のことをよく聞いていた。彼が占領軍のアメリカ陸軍の将校として日本に滞在中に、同期のサマー・ハーマンと一緒に桑田を探し出した。

「我々は WPI 同窓会から彼の住所を聞いており、東京から京都まで汽車で訪ねた。」ハーディングは思い起こしながらこのように述べている「彼は子供のころイメージしていたような伝統的な日本家屋に住んでいた。戦争の被害は全く受けていなかった。非日本的なものは黒のラッカーが塗られていたことと、西洋式の食堂と食卓と椅子だった。彼はそれらをとても自慢していた。」

二人の WPI の卒業生は桑田と彼の奥さんに歓待され、和やかな会話を楽しんだ。桑田は彼の日本庭園の中の池の近くにある四角い穴のあいた灯篭を示しながら「20 マイル離れた山麓で毎年秋、山焼きのお祭り（大文字焼きではないかと思いますが、季節が違うので違うかもしれません）がある。その火がこの四角い穴から見え、その光が池に反射する。我々の滞在時間は短かったが、彼は我々の訪問をとても喜んでくれた。彼は WPI を卒業したことと、その組織と連帯できることに誇りを持っていた。そして、戦後日本とアメリカの友好関係がより深まることを強く望んでいた。」

WPI の最初の二人の日本人留学生の物語の最後に以下の文章を記して終わりとしたい。1949 年 9 月 16 日の日付の下村明氏からの手紙で、「貴大学の卒業生桑田權平氏は 9 月 13 日 80 歳で亡くなられました。奥さんに介護を受けていたが、お子さんはおりません。桑田先生は 12 年前に亡くなった私の病弱だった父下村幸太郎の親友でした。」

2011/Feb/25　市川　新訳

日高佐和子さんに教えていただいた部分が多く、感謝します。